連歌論集四

木藤才蔵校注

連歌論集四

中世の文学
三弥井書店刊

連歌論集(四)
第一期第十五回配本
中世の文学
定価 七八〇〇円
(本体七五七二円)

平成二年四月十五日 初版第一刷発行

©校注者 木藤才蔵
発行者 吉田榮治
製版所 第二整版

東京都港区三田三―二―三九
発行所 株式会社 三弥井書店
電話東京(〇三)四五二一八〇六九
振替口座 東京九―二一一二五番

ISBN4-8382-1015-9 C3391 P7800E
第二整版印刷・協栄製本

目次

解説……三
凡例……六二
梅春抄……六五
連歌延徳抄……八七
若草記……一〇五
景感道……一一九
肖柏伝書……一四三
永文……一五九
連歌比況集……一六九
五十七ヶ条……一九七
雨夜の記……二三一
篠目……二〇七
連歌初心抄……二二九
四道九品……二六五

当風連歌秘事……三八五
引用句初句索引……四一五

此为试读,需要完整PDF请访问: www.ertongbook.com

解説

梅春抄

〔構成・内容〕　本書に記されている内容の大体を示すと、次のとおりである。参会者の留意すべきこと、道の冥加を願うべきこと、初春から十二月に至る月々の発句に詠むべき景物、面にせざる詞、式目にかなった連歌用語の扱い方、述懐・懐旧・神祇・釈教の詞、切字について、こそ・ぞ・らんに付る事、付句にらんとする場合の心づかい、心のこあて、付合において留意すべきこと。以上に列挙した内容を一つ書で記してあり、巻末には、「書あらはさずとも比分別はあるべけれども（中略）一覧の後はやがて火中に捨てたまはば、本意たるべく候。あなかしこ〳〵」と、奥書らしいものが、本文に引き続き記されている。

なお、本書の書名について一言しておくと、写本によって、梅春抄のほかに、梅春集・梅薫集・色葉梅薫集・梅薫抄などと記されている。

〔成立・著者〕　本書の著者に関しては、太田武夫氏蔵本の巻末に、

梅寿丸殿　参　　兼載

とあるところなどから、猪苗代兼載が梅寿丸に宛てて執筆したものであると考えることができる。この梅寿丸に関して、伊地知鐵男氏は、北野社松梅院の梅寿丸であろうとされ、その論拠として、北野社家日記に、明応九年二月、足

利義高が北野社にたち寄って歌会を催した際、梅寿丸が松梅院を代表して柳五荷と五目銀の折紙を進上し、かつ和歌を詠んだことが記されていることをあげている。（古典文庫『連歌論新集』解説）

ところで、湯之上早苗氏は、『連歌貴重文献集成　第八集』（昭和57年4月刊）の梅春集の解題において、広島大学本の巻末に、

梅寿上方へまいる　　宗春在判

とあるのによれば、本書は兼載が宗春と号していた文明十八年ごろまでの作となること、北野社家日記によれば、延徳三年（一四九一）十月に、松梅院の次子梅寿袴着の事が見えるから、長享年間の生まれで、兼載が宗春と号した頃には、まだ生まれていないこと、しかし、松梅院では梅寿の名をつけるのが通例のようで、梅寿の名は、このほかにも見えているから、これを誰と特定できないということなどを指摘されている。ほぼ首肯できる見解である。

〔諸本〕　管見に入った六つの写本は、二系統に大別できる。このうち、広島大学蔵本と編著者架蔵本の二本は、文明十八年以前に執筆された写本の面影を残している。それに対して、太田武夫氏蔵本・天理図書館蔵本・大阪天満宮蔵本・神宮文庫蔵本の四本は、原写本に加除修正を加えた写本の系統に属するもののようである。しかし、その四本の間には、相当大きな異同があり、その中でも、天満宮本と天理本は、独特の本文を有している。次に諸本の書誌とその特色について記しておく。

1、編著者架蔵本

袋綴、一冊。縦二三センチ、横一七・一センチ。表紙左隅の題簽は白紙。料紙は楮紙。第一丁遊紙。その裏の左下隅に、「實春之」とある。第二丁オモテから本文。本文の前に、「梅春抄」とある。一面一〇行、一行一七、八字前後。巻末には、

梅寿上方へ　申給へ

とあって、改丁して「式目歌」と題して、衣季やの歌以下四十八首を記し、さらに、「新式抜書」と題して新式の抜書を記し、そのあとに、

御けひこのため一書の事承候。先々見え来候分、大かたしるし参らせ候。重而御申参らせ候。

松もしさま　申給へ　　春

とある。この奥書によると、兼載に寄せられた幾つかの質問を中心にして、初心者用に執筆されたもののごとくである。「松もしさま」は松梅院をさし、「春」は、広大本の奥書などから類推して、「宗春」の「春」を意味する署名とみてよいと思う。室町時代の写本。本書の底本に使用。

2、広島大学蔵本

列帖装、一冊。縦二〇・二センチ、横一五・四センチ。外題はなく、第一丁オモテ、左肩に、「梅春集　兼載公」、右下に、「亀房」とある。第二丁オモテから本文。本文の前にも、「梅春集　兼載公」とある。一面一〇行乃至一一行。一行一六、七字前後。巻末に、「梅寿上方へまいる　宗春在判」とあり、次の第二五丁オモテの左隅に、

于時永正五年林鐘廿七日

とある。永正五年の写本とみてよいであろう。本文は架蔵本と同系統であるが、なお相当の異同がある。金子金治郎編『連歌貴重文献集成　第八集』(昭和57年4月、勉誠社刊)に、その写真複製を収め、湯之上早苗氏執筆の解説がある。この解説も、湯之上氏の解説を参照して記した。本書の校合に使用。

3、太田武夫氏蔵本

袋綴、一冊。縦二二・四センチ、横一六センチ。外題も内題もない。料紙は厚手の楮紙で、第一丁は遊紙、第二丁オモテから本文。第一七丁ウラまで。一面一〇行、一行一七、八字から二三、四字前後。室町時代写本。巻末に、

梅寿丸殿　参　　兼載

持主川西次郎殿

とある。なお、本写本を収めてある帙の左肩題簽には、

兼載連歌抄　梅薫抄

とある。架蔵本や広大本とは別系統に属する写本で、両者を比較してみると、二、三行から十行前後に及ぶ異文や欠文を十数箇所にわたって見出すことができるが、その多くは、天理本・天満宮本・神宮本などと共通している。しかも、それらの異文や欠文の多くは、書写の際に起った誤字や誤脱に基くものではなく、意図的になされたものと考えられる。したがって、この系統の写本は、文明十八年以前に成立していたと考えられる架蔵本系統の写本に手を加えることによって成立した写本とみることができる。この太田本は、古典文庫の『連歌論新集』(伊地知鐵男校、昭和31年12月刊)に翻刻されている。本書の校合に使用。

4、天理図書館蔵本(れ1.1、84)

袋綴、一冊。縦一五・六センチ、横二一・八センチ。表紙左寄りに、うちつけ書きに、

付合切掛　紹巴作

梅春抄　兼載作

と記す。前半は、「付合切掛」、後半は、「梅春抄」で、本文の前には、「梅春集」とある。一面一一行、一行一二、三字前後。巻末に、

兼載在判

梅寿殿まいる

右本共武州神ノ郡忍保村ニ而日野角右衛門殿御本ニ而移し申候　以上三日ニテ書畢

元和十天子卯月上旬ニ書之
寛永元年

とある。江戸時代初期の写本。太田本系統の写本であるが、この本独自の異文を相当有している。本書の校合に使用。

5、大阪天満宮文庫蔵本（丙、四二）

列帖装、一冊。縦二三・一センチ、横一八・一センチ。南曲奉納本のうち。本文の前に、「梅薫集」とあり、巻末には、

享禄三年三月十七日　　法眼兼載
色葉梅薫集　終

とある。享禄三年（一五三〇）は、兼載の没した永正七年（一五一〇）より二十年後のことであり、法眼兼載という署名も問題である。太田本の系統に属する写本であるが、二、三行から十数行に及ぶ独自の異文を十箇所前後有するほか、独自の欠文もあり、この系統の写本の中では、最も特異な本文を有する写本である。後人の手が相当加わっているようである。本書の校合に使用。

6、神宮文庫蔵本（三、二一〇二）

袋綴、一冊。縦一七・七センチ、横二五・二センチ。表紙左肩題簽に、

連歌初心鈔　連歌十体

とあり、第一丁オモテ左隅には、

連歌初心鈔

と、うちつけ書きに記されている。本文の前にも同様の内題がある。本文は、「発句に三名きれと申事有」以下「は

ね字の事」まで二十七項にわたって記述があり、引き続き、梅春抄の後半の部分（すまじき詞以下）を記す。ただし、項目の順序は他の写本とは異なっていて、てにはをとりて句付様・ぞと云てにはに付様・らんと云てにはに付様・すまじき詞・発句に十三の切字の事・連歌のこあてと云事の順に記されている。巻末には、

梅寿殿まいる　　兼載在判

とあり、そのあとに「連歌十体」を合綴してある。江戸時代初期の写本。本書の校合に使用。

連歌延徳抄

〔構成・内容〕　最初に、連歌は百韻の付け進め方によって、よくも悪くもなるものだから、付様に変化を持たせることが大事であるとして、付様の基本について概説した上で本論に入り、心の砕けた句に景気の句を付ける場合をはじめ、種々の付様を二十二項に分けて、それぞれに例句をあげて解説してある。最後に、以上にあげた句は、「そぎ捨てて色どられぬ」すぐれた句であって、常の付様の句は省略したこと、百韻を付け進めてゆく場合には、変化させることが大事だということを、くり返し説いて結びとしている。

〔成立〕　国会本や野坂本その他の巻末に付載されている奥書によれば、兼載が周防の国に下向中、その旅宿において連歌が興行され、大内政弘が、「迹つけよ庭の訓への宿の雪」という発句を詠んだのに、兼載が「人目を今は冬草の花」と脇句をつけた、その後、この一冊を著作して政弘に贈ったとある。兼載は延徳二年（一四九〇）夏、山口に下向、翌三年の春を山口で迎え、同年五月、山口を出発して帰京の途についている。前記の政弘の句には雪が詠まれているから、延徳二年の冬の句と考えられ、それも十一月の末から十二月にかけての間の句の可能性が強い。その後に本書が執筆されたとすれば、著作の時期は、延徳二年の冬から翌三年の春にかけての間のこととなる。

兼載はその後、政弘に贈った初撰本に手を加えて、例句十一句をけずり、明応五年（一四九六）二月十三日に、安

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com

富匠作に贈っている。蓬左文庫本がこれで、兼載の自筆である。その後兼載は、初撰本から例句三句をけずる一方において、新に例句二句を加え、解説にも全面的に手を加えた三撰本を作成し、永正三年（一五〇六）六月上旬、平頼重に贈っている。関東帰住以後のことである。

本書は、昭和三一年刊の岩波文庫『連歌論集　下』や同三二年刊の『俳諧大辞典』において、「連歌延徳抄」という書名で解説されて以後、最近刊行された『日本古典文学大辞典』に至るまで、すべてこの書名で扱われている。しかし、管見に入った写本の中で「連歌延徳抄」と題するものは一本も見出せない。天理本や京大頴原文庫本には「薄花桜」、京大一本には「連歌求詠書」、野坂本には「兼載伝授連歌秘書」とあるが、このうち、天正頃の写本と考えられる野坂本の場合は、正式の書名とは考えられない。すると、書名のあるものは、すべて江戸時代中期以後の写本ということになるが、それに対して、兼載自筆本である蓬左文庫本、それに資料館本や国会本など、江戸時代初期以前の写本には書名が記されていない。このように見てくると、本書には、著者自身によって命名された書名は、なかったようにも考えられる。一般に行なわれている「連歌延徳抄」という書名は、蓬左文庫本の奥書に「此一冊者延徳之比、応或尊命注之」とあるのによって、近代になって付けられた書名ではないかと考えられるのであるが、いかがであろうか。

〔諸本〕

1、国会図書館蔵連歌合集本（WA16、94、2）

連歌合集、第二集所収。袋綴、一冊。縦一九・九センチ、横一五・三センチ。花能万賀喜・和漢聯句・当世連歌ニ用詞の事その他と合綴。江戸時代初期写本。料紙の上下を截断しているために文字の一部分が切れている部分もあるが、解読に支障はない。外題・内題ともになく、巻末に、「此一帖ハ防州下向ノ時」云々という奥書がある。例句の総数五十五句。初撰本。湯浅清著『心敬の研究　校文篇』（昭和61年3月、風間書房刊）に、「心敬秘説」と題

して翻刻されている。本書の底本に使用。

2、京都大学国語学国文学研究室蔵潁原文庫本（コ、Gb、73）

袋綴、一冊。縦二四・六センチ、横一八センチ。「連歌秘要集」のうち。花能万賀喜・当世連歌ニ用詞事・知連抄・四道九品等と合綴。巻首に目次があって、「第一　薄花桜」とあり、本文の前にも「薄花さくら」とある。巻末には、「此一帖者防州下向之時」云々の奥書がある。江戸時代中期の写本。本文は底本ときわめて近い関係にある。本書の校合に使用。

3、野坂元定氏蔵本

袋綴、一冊。表紙中央に題簽をはって、

兼載伝授

連謌秘書

と記す。後人の筆跡である。内題はない。一面七行、一行一七字前後。巻末に、「此一帖ハ防州下向之時」云々という奥書があって、そのあとに、

天正十一年八月吉日

とある。その頃の写本である。初撰本であるが、底本と対校してみると、多少の異同がある。本書の校合に使用。

4、天理図書館蔵本（れ、1.2、3）

袋綴、一冊。縦二二・六センチ、横一六・一センチ、江戸時代末期写本。表紙左肩に、「薄花桜」とうちつけ書きに記し、本文の前にも、「薄花桜　　牡丹花」とある。巻末には、「此一帖防州下向之時」云々の奥書があって、そのあとに、

右之一冊心敬秘説相承之旨兼載書顕処也。予加省見次写摸之畢（中略）他見をゆるす事すへからすと也

于時弘治二暦孟夏中候

万治三年七月下旬　　信胤写之

這薄花桜はしめに牡丹花とあるは牡丹花老公の奥書をかゝれし物をえて信胤といふ人写したるたるにやあらん。此本北斗庵宗円所持之小冊をうつし侍りぬ。

文政四年五月

とある。肖柏伝書・宗長之書・何路百韻（能順）を付載す。初撰本で野坂本ときわめて近い関係にある。本書の校合に使用。

5、京都大学国語学国文学研究室蔵本（コ、Gb、14）

袋綴、一冊。縦二六・七センチ、横一九・五センチ。表紙左寄に、「連歌求詠書」と、うちつけ書きに記す。内題はない、第一丁オモテから本文。巻末に、「此一帖防州下向之時」云々の奥書はなく、そのかわりに、

此一帖末世間流布以隠蜜之儀相伝云々。如何。雖為大切之方習年之中不可及披見者也。

とある。初撰本で野坂本ときわめて近い関係にある。本書の校合に使用。なお、この写本の後半の部分は、「宗般種玉庵に不審条々」から成り、最後に、「這一冊天明四年辰十月下阮日書写之」云々という奥書がある。天明四年の写本。

6、蓬左文庫蔵本（108、61）

袋綴、一冊。縦二七・四センチ、横二〇・六センチ。外題も内題もない。巻末に、

此一冊者延徳之比応或尊命注之　憚外見者也　然而今安富匠作就此道年来朋友也　懇望之間重而染愚筆畢　早破々々

于時明応五年二月十三日　　兼載（花押）

とあって、兼載の自筆本である。初撰本から例句十一句と、その注文をけずり、その他の本文にも多少手を加へたものである。伊地知鐵男氏によって、岩波文庫『連歌論集　下』に翻刻されているほか、金子金治郎編『連歌貴重文献集成　第八集』（昭和57年4月、勉誠社刊）に、その影印本を収める。本書の校合に使用。

7、国文学研究資料館蔵本（99、54）

袋綴、一冊。縦二四・八センチ、横一七センチ。雲鶴文様の緞子表紙。見返し金銀切箔散らし。外題も内題もない。巻首と巻末に一丁ずつ遊紙。第二丁オモテから本文。一面八行、一行一六字前後。巻末に、

右平頼重依為此道器用執心染愚筆与之　不可免外見者也。

于時永正丙寅林鐘上旬

耕閑兼載

□□房（不明）

とある。初撰本と比べてみると、「老ぬれは思ひしことのかひもなし」「はくゝみたてし父母のあと」「枯野の松の雪の夕くれ」の付句三句と、その注文を欠くが、「わか菜つむあれ田のくろの雪とけて」「日くらしの鳴こゑやとす嶺の松」の付句二句と、その注文が加えられているほか、句の配列が相当異っており、本文の解説も、相当書き変えられている。三撰本というべきものである。

若草記

〔構成・内容〕　最初に、本書を著作した経緯を記して序とし、ついで、連歌の古い姿と新しい姿、本として学ぶべき体・付合における心と詞・わかりやすい句・強い句と美しい句・百韻の行様・付にくい句・非を正されること・句作にあたっての心づかい・初心の時の句数・作者としての心の持様たしなみ・連歌の一座の遅速・会席のあり方その

他、十五箇条にわたって問答体で記されている。そこに説かれていることは、心敬の所説、特に心敬法印庭訓の所説と重なる点が多いが、初心者向きに、よく消化されて表現されている。

〔成立〕　兼載が奈良に下向中、興福寺妙憧院の稚児・松山駿河守家秀の子息藤賀丸の質問に答えて著作されたもの。明応六年（一四九七）姉小路基綱によって、本書が後土御門天皇の叡覧に供せられて以後、世間に流布することになった。したがって、本書が著作されたのは、明応六年以前であることは確かであるが、それ以上に詳しいことは分らない。

本書は、群書類従所収、その書名「若草山」によって一般に知られているが、管見に入った写本中で、この書名を有するのは、書陵部蔵の桂宮本だけで、しかもこれは近代に入っての筆跡である。日本女子大本・国会本・伏見宮本・細川文庫本・太田本・大阪天満宮本は「若草記」、太田一本には「若草之記」、御所本・土橋文庫本には「若草」、京大谷村本には「和歌活套」とある。諸本によってまちまちであるが、永正五年（一五〇八）の奥書があって、その頃の書写と見られる太田本その他、江戸時代初期以前の写本の多くが書名としている「若草記」によるべきであろうか。これは、太田一本の書名のように、「若草之記」と読んだのであろう。

〔諸本〕

1、日本女子大学国文学研究室蔵本（Wa、911、Ken）

袋綴、一冊。縦二二・五センチ、横一六・五センチ。表紙左肩に題簽をはってあって、

若草記

と記す。表紙裏の中央にはってある短冊型白紙には、「飛鳥井二楽筆」と記す。二楽軒(雅康)は、永正六年(一五〇九)、七四歳で没。第一丁オモテから本文。内題なし。一面七行、一行一四、五字前後。墨付二六丁。料紙は薄様斐紙。巻末に、

此一帖は相園載公の述作なり。ぬしは卑下の心ふかくて（中略）いさゝか翰墨に命するのみ也。時に明応丁巳の春のすゑに此書をしるす。

姉小路殿

八座一閑人基綱

とある。第二六丁目の姉小路殿とある右脇に短冊型白紙をはってあって、

溝杙柳江（若草記奈良の京）　一冊

とある。柳江は和泉国溝杙の住人。堺にいた肖柏のもとにも出入りしていた連歌師で、大永（一五二一～）天文（～一五五五）頃の人である。室町時代末期写本。本書の底本に使用。

2、国立国会図書館蔵本（ニ、ち、12）

袋綴、一冊。縦二三・五センチ、横一六・九センチ。表紙左肩にはってある題簽に、

若草記　兼載作

と記す。遊紙一丁。第二丁オモテから本文。一面八行、一行一七、八字前後。墨付一七丁。巻末に、「此一帖は相園載公の（中略）明応丁巳の春の末に此事をしるす　八座一閑人基綱」とあって、そのあとに改丁して、

此一冊不慮備叡覧秀趣姉小路相公被加奥書了　豈非眉目乎

明応第六之暦沽洗下旬　法橋兼載在判

此一冊連歌之奉行兼載法橋作也　発起者松山駿河守家秀息興福寺妙憧院之童形藤賀丸依競望記之云々

最上御本所義光依尊命加一覧者也

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com